

「有限だからこそその創造性」

平成30年度卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日まで、お子様を立派に育ててこられた保護者の皆様にも、心よりお喜び申し上げます。また、ご指導に当たられました教職員の方々に感謝の意を表したいと思います。

今、中学の3年間を振り返って、皆さんの心にはどんな思いがあるでしょうか。楽しかったことや悲しかったこと、晴れがましかったことや悔しかったこと、中学生時代の経験は、あとで振り返った時に、独特の色合いで光輝いて見えるでしょう。そして、それはみなさんの掛け替えのない宝物です。

さて、先ほどの校長先生のお話にもありましたが、いま世の中はAIやロボットによる技術革新が進んでいます。そして、AIやロボットがますます社会に進出するようになると、人間がいままでやってきた仕事がそれらに奪われ、やがて人間は無用の存在になるのではないかと、言われたりしています。いまある職業の何分の一かは将来なくなり、社会には大量の失業者が溢れるのではないかと。

そんな折に、私は去年の秋、東京で開かれた「AIと芸術」に関するシンポジウムに招かれました。大抵のストーリーでは、AIやロボットはたくさんのデータをすばやく計算することは得意だけれども、まったく新しいものを創ること、クリエイティブなことは苦手で、中でも芸術作品は決して創れない、というようになっています。ですから、創造的なことこそ人間にしかできないものなのだから、皆さんも、それを将来めざしましょう、という具合に話は落ち着きます。

でも、その結論はいいとしても、AIやロボットは人間よりも本質的に能力が劣るから、モーツァルトやピカソになれないのでしょうか？ 私は、能力だけを考えてみたら、AIやロボットもモーツァルトやピカソになれるのではないかと主張しました。

むしろ、AIやロボットが芸術家になれないとしたら、それは彼らの能力に原理的な限界がないからかもしれません。ですから、逆に人間がモーツァルトやピカソになれるのは、人間にはそれ固有の有限性、つまり限界があるからではないのでしょうか。皆さんにはとても不思議に聞こえたかもしれませんが、皆さんもぜひ考えてみて下さい。

もし皆さんが、文字通り万能で、何でもかんでもできる存在だったとしたら、

世界は一体どう見えるでしょう？ そうなれば神様のように何でも意のままにできるのですから、特別に「美しいもの」とか「醜いもの」というのは存在するのでしょうか？ ことさらに「良いもの」とか、「嫌なもの」というのは？

もしかすると、私たち人類は、いろいろな点で制約された有限な存在だからこそ、人間らしい創造性を発揮できるのかもしれませんが。人間の本質的な限界こそが創造性の生みの親かもしれません。そして、それが人類の「個性」だとすると、同じことは一人ひとりの人間にも言えるのではないのでしょうか。つまり、それぞれの「個性」の中の、一見して他人より劣って見える「弱み」にこそ、私たちの創造性の根拠、その根っこがあるのではないのでしょうか。

皆さんがこれから未来に向かって羽ばたいていくとき、自分の「個性」の中でもそれぞれの「弱み」を大切に、皆さんが各々の分野で自分なりのモーツァルトやピカソになっていくこと、この願いを以て、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

平成31年3月9日 金沢大学 理事・副学長 柴田 正良